

報告 「体育祭のゴミ問題」を考える環境学習の実践

森 幸一
甲南中学校

An Environmental Education Activity in Kounan Junior High School Dealing with the Rubbish Problem at Athletic Festival

Kouichi MORI
Kounan Junior High School
(受理日 2001年11月5日)

1 はじめに

滋賀県甲南町立甲南中学校（以下本校）は1998年現在生徒数892名、学級数26、教職員数50名の大規模校である。昭和22年に創立され、生徒の自立性と主体性を高めるためにさまざまな活動がなされている。

本校の特色は学校行事的諸活動にある。例えば、生徒から三人行事と呼ばれている体育祭、文化祭、予餞会はその約10日前から、放課後のほとんどの時間を使って生徒が取り組むほど熱の入る行事である。また、意見発表会、平和行進など伝統として引き継がれてきたユニークな取り組みも多い。

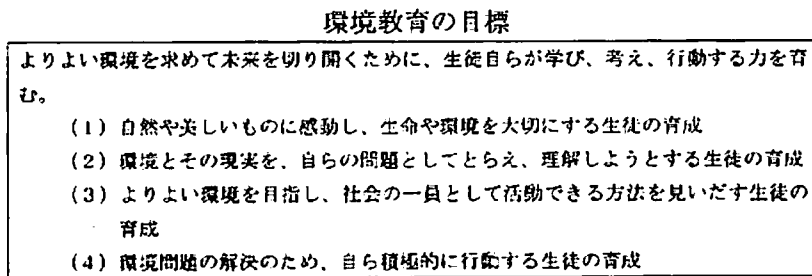
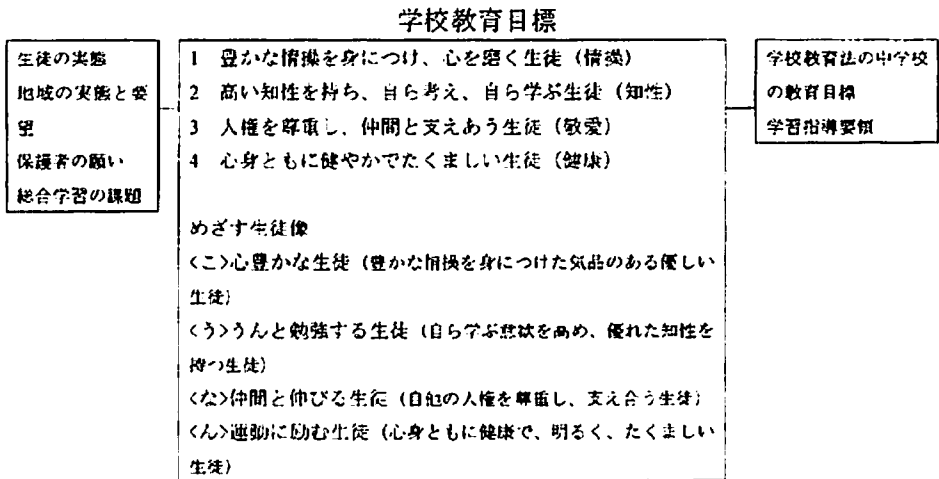
環境教育に関しては、「よりよい環境を求めて未来を切り開くために、生徒自らが学び考え、行動する力を育む」という目標を立て、教科での学習、学級活動やその他の特別活動のさまざまな場面で実践を行う全体計画を立てている。しかし、教科での学習は別表Ⅰのように断片的な学習になりがちである。また、学級活動では、水生昆虫の観察など体験的な学習を一部取り入れてはいたが、VTR教材を視聴したり、読み物資料で学習するなど知識・理解の学習が中心で、実際に身近な環境問題について話し合ったり、その解決のために行動する実践には至っていないことが多かった。そこで、1998年度は体育祭のゴミ問題を考えることを中心に、環境問題の解決のため自ら積極的に行動する生徒の育成に焦点を当てて環境教育を展

開した（図1、表1）。

また、1998年度は、校内研究の主題として「生き生きと学びあい、豊かな心を持ち、ともに高めあう生徒の育成～生徒の自主的、実践的な活動を支援するための指導計画、指導方法の工夫～」を設定し、学校行事を中心として、生徒の自主的な活動を支援する方策について研究していた。その中では、体育祭、文化祭、予餞会などの行事の意味や目的を明確にしながら、学校行事の質的向上をはかることが必要であった。なぜなら、将来の「総合的な学習の時間」を考えると、これらの伝統的に取り組んできた学校行事をベースにした学習を展開することが現実的かつ合理的で教育効果が高いのではないかと考えられたからである。

行事を通して「横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」（1998、文部省）等を生徒が自ら学び、その結果たくましく生きていくことのできる資質を身につける学習をめざすことが、本校としての特色を生むと考えている。そのためには、学校の教育活動の重要な柱の一つとして、学校行事の全体計画をこのような資質の育成というねらいから改めて組み立て直すことが必要である。また、国際理解教育、環境教育、福祉教育、情報教育等の学習活動の統合、発展の場とするような新たな視野を切り開くことが校内研究の目的の一つでもある。

1998年度は、このような目的を達成する試みの



領域別実践内容

	教科	学級活動	学校行事/生徒会活動/クラブ活動
		地域環境を基盤にした自然や社会事象の教材化と、環境副読本「あおい琵琶湖」の活用	直接体験的な学習や、自主的実践的な活動を目指す
1学年	別表Ⅰ	ゴミ問題などの身近な環境学習 琵琶湖やそま川などの地域の水環境	体育祭のゴミ問題を考える
2学年	別表Ⅱ (省略)	学習 (年間4時間)	
3学年	別表Ⅲ (省略)	地球的規模での環境問題 (年間4時間)	

図1 環境教育の全体計画

一つとして、「体育祭」を中心に「忍者の里クリーン」「意見発表会」という学校行事を「ゴミ問題」と「作戦」（以下「クリーン作戦」と略記する）や「体育祭のゴミ問題を考える」というキーワードで結びつけ、体育祭の「応援バツ

表1 別表I 環境教育に関わる各教科の年間計画 第1学年

	国語	社会科	数学科	理科	音楽科	美術科	技術家庭科
4月	野原はうた	人々の生活と環境	論理的思考能力と	身のまわりの生物の観察	春鑑賞を通して自然の特徴や美しさを感じ取る	校舎を描くことで、生活環境を振り返る。	家庭生活
5月	野原に生きる生物たちの生きる喜びを味わう。	自然環境は人々の生活様式を決める大切な要素であることを理解する。 東アジアの国々 人口問題について考える。	情報処理能力を養い、環境教育の基礎となる 数理的能力をのばす。	自然を観察する態度を身につける。 植物の生活と種類 酸素の供給源としての植物、花粉症。 あおい菟菝湖「かわりつつある滋賀の植物」を学習する。			石鹸と合成洗剤の違いと環境に与える影響について考える。 室内の整備と美化
6月		EU諸国 工業の発達にともなう環境問題について理解する。		身のまわりの物質の変化 薬品の取り扱いを学ぶ。酸性雨の原因となる気体について知る。			
7月		西日本 工業排水による環境汚染が人間生活を脅かす危険性があることを学ぶ。瀬戸内海や琵琶湖の水質汚濁について考える。				木材加工 木材資源の現状について学習する	
9月	自然と共に生きる	中央日本 北陸工業地帯における公害病の発生について学ぶ。			モルダウ鑑賞を通して自然の特徴や美しさを感じ取る	身近な風景を描くことで、自然のすばらしさを感じ取る。 (写生会)	
10月	自然と人間生活との関わりについて考える。	北日本 北海道のリゾート開発について考える					
11月		日本と世界の結びつき 発展途上国の地域開発と、それともなう環境破壊について知る。		地球と太陽系 大気の汚れや光害が星の観察に与える影響について知る。			
12月		日本と国際社会 アマゾン川流域の開発と環境破壊について考える。世界の環境問題について知る。					
1月							
2月							
3月							

クデコレクション」(以下「応援バック」と略記する)製作によって発生する大量のゴミ問題やその処理の仕方について学級討議を行うなど、「体育祭のゴミ問題」という、生徒にとって身近な問題を解決する環境学習(森、1999)を展開することができた。本報告では、「体育祭のゴミ問題」に関して、学校行事、学級活動、生徒会活動に焦点をしばって記述する。

2 取り組みの内容

生徒が体育祭のゴミ問題について考えるきっかけとしては、学校のゴミ焼却炉が使えなくなったことがあげられる。生徒会では、体育祭や文化祭で出る大量のゴミについて取り組み、全校での議論の末、今までの応援バックを使い捨てから再使用できるものに改め、フィナーレのファイヤーストームを中止した。

応援バックづくりは、体育祭で伝統的に取り組まれているものである。近くの竹やぶから竹を切り出し、太い針金で組み上げて、高さ5m、幅3mものバックデコレーションを25すべての学級がたてる(写真1)。学級数が多くなってきたので、その大きさは少しずつ小さくなってきたということだが、すべての学級のもの立ち上がった様は壮観でさえある。

そして、体育祭のフィナーレとしてそれらを集めて燃やし、その周りで全校生徒がダンスを踊る。800人以上の生徒が手をつなぎ踊るのである(写真2)。このフィナーレを全校生徒は体育祭当日の大きな楽しみとしている。

このような行事の主体は生徒であり、それをまとめるのが生徒会である。行事の計画や運営など生徒の自主性に任されている部分は多く、行事に対する生徒の思い入れは大きい。1998年度は、このような体育祭以外の他の行事や生徒会活動(平和行進、意見発表会、代議員会など)についても、「ゴミ問題」というキーワードで結びつけることによって、環境学習の広がりや継続性を持たせるようにした。

「クリーン作戦」もそのような学校行事の一つである。これは、生徒会のボランティア委員会の呼びかけで、甲南町内19カ所の清掃、美化活動を半日かけて行うものである。空き缶、紙ゴミ、ビニール、ビンなどのゴミが、軽トラック何台分も集められる。1998年度は6月6日に行われた。

これまでは、「クリーン作戦」で集められたゴミのうち、燃やせるものは学校の焼却炉で燃やしていた。しかし、1998年度から焼却炉は使えなくなった(文部省、1997)。ダイオキシン類発生の疑いがあるからである。

また、時期を同じくして「意見発表会」が行われた。これは20年以上続けられている学校行事で、生徒一人ひとりが、皆の前で自分の意見を発表しあい、学級代表、学年代表の意見を選んでゆく。毎年、環境問題に関する意見が多くあるので、環境問題を学ぶよい機会である。1998年度は、ダイオキシンに関する意見が数多く出された。

ところで、環境問題については理科や社会、保



写真1 旧の応援バック



写真2 体育祭のフィナーレ

健、技術家庭などの教科で取り上げているが、ダイオキシンについては、詳しく説明のできる教師がいなかった。そこで、「クリーン作戦」を前に、環境学習の時間を設定した。中間テスト期間の1時間を割いて、滋賀大学教育学部環境情報コース助教授の水上善博先生の講話を聞いた。

日本のゴミ問題から、特にダイオキシンの恐ろしさについて話を聞き、甲南町のゴミ処理の状況について調べた結果を教えていただいた。また、ダイオキシンが発生しやすいのは、有機物と塩化ビニールと金属を低温で焼成させたときであると教えていただいた。この講話を聞いた生徒の感想の中で、「毎年燃やしている応援バックからダイオキシンが出ているのではないか」という懸念が起り、生徒会の代議員会で取り上げることになっ

表2 応援バックデコレーションづくり実施についての各学級の意見

意見の内容	意見を述べたクラス数
ゴミを減らす工夫をして応援バックを作る	1年5クラス、2年6クラス、3年6クラス
応援バックの代わりに違うものに取り組む	3年2クラス
応援バックをやめて競技に重点を置く	1年3クラス、2年2クラス、3年1クラス

た。

まず、代議員会で体育祭の応援バックの問題が話し合われ、「体育祭のフィナーレはやりたいけれども、応援バックを燃やした炎からダイオキシンが出ているのではないか」との意見が出された。代議員会だけでは結論が出なかったので、この問題について学級討議を行うことになった。特設の学級活動の時間を設けて、すべての学級が同時に話し合った。

その放課後、もう一度代議員会が開催された。ダイオキシンは恐ろしいけれども、応援バックやフィナーレをなくすことには、3年生を中心に強い反対があった。体育祭は三大行事の一つであり、そのフィナーレが一番盛り上がる場所だからである。この代議員会では結論が出ず、もう一度クラスで意見を聞いてみて、再度代議委員会が開かれた。

ダイオキシンが発生するのは困るが、みんなが楽しみにしている応援バックとフィナーレはどうしてもやりたい。バックデコレーションを作るにしても、なんとかダイオキシンを押さえる工夫はないものだろうか。各学級からの意見が代議員によって発表されていった(表2)。

最終的に、この会議で「応援バックデコレーションは作る。しかし、環境に配慮する方法を考える」と決議された。具体的な実施方法については、生徒会執行部に一任された。生徒会執行部で話し合われたことは、まず、ダイオキシンが発生するようなゴミ処理の方法はやめること、できるだけ3つのR(リデュース、リユース、リサイクル)の精神を生かして取り組むこと、伝統ある体育祭の盛り上げりを損ねないようにすること。誇りを持ってやり方を変えること、であった。

まず応援バックの大きさを縮小してゴミの減量化を図ることが計画された。絵の部分はどうして



写真3 新しい応援バック

も毎年捨てなければならぬからである。また、これまで竹や針金で作って使い捨ててきた枠を木で作り、毎年再利用できるものに改めた(写真3)。この費用45万円は、PTAのバザーの収益金でまかなった。

これらのことにより、応援バックを廃棄することによるゴミは、前年までより大幅に削減された。あわせて、応援に使う小物類に塩化ビニールのタフロープを使うことも生徒会によって禁止された。

さらに、フィナーレのダンスは、かがり火なしで実行することに決められた。

上に述べたように、応援バックの新しい木の枠の費用はPTAのバザーによって捻出された。こ

表3 本実践の時間的な流れ

月 日	学校行事	学級活動	生徒会活動
6月2日		環境学習（講話等）	
6月6日	忍者の里クリーン作戦		
6月中旬	学級・学年意見発表会		
6月24日	全校意見発表会		
7月1日			生徒会執行部会
7月3日		学級討議	代議員会
7月4日		学級討議	代議員会
7月6日			
7月7日			代議員会
7月8日			生徒会執行部会
夏休み	平和の集い（全校生徒に発表）		生徒会執行部会
9月1日	体育祭の取り組み始まる		
9月9日	体育祭予行		
9月12日	体育祭		
	PTAバザー		
	平和行進		

のバザーは、毎年体育祭当日の昼休みに行われているものである。家庭でいらぬものを学校に持ち寄り、それにPTAで値札を付け販売する。その収益は、学校に必要なものを購入するのに利用されているのである。

体育祭は、9月の第2土曜日に開かれ、生徒の保護者はもちろん、近隣在住の町民がこぞって見物に来る一大イベントである。陸上競技的な種目はもちろん、マスゲームや組立体操を、多くの町民が見物する。

45年間続いている平和行進は、体育祭の中の伝統的なプログラムである。午後の最初に、生徒は全員制服に着替え、行進し、最後に「ヘイワ」の人文字を書く。それは、1学期に学んだ平和学習の発表の場であり、アナウンスや生徒会長の平和宣言などで町民に平和への行動をアピールするよい機会である。1998年度は、平和を反戦という視点からのみとらえるのではなく、毒物混入事件などの犯罪や環境問題からも私たちの平和は守られるべきであると主張し、応援バック変更の理由を町内にアピールした。

この平和行進は、生徒会執行部が企画し、事前学習や行進の練習なども執行部が行う。事前学習では、ダイオキシンに関するプリントを自分たち

で作り全生徒に配るなど、改めて応援バックを変更した理由について全校で確認し、また町民に誇りを持って訴えることができた。

3 取り組みの成果と課題

これまで体育祭の応援バックは、竹、段ボール、木材、塩ビのタフロープ、番線などでつくってきた。そして、体育祭のフィナーレではそれを燃やしてかがり火とし、その周りでダンスを踊ることが生徒の最大の楽しみになっていた。このフィナーレで出るゴミが問題として指摘されたが、生徒にとって、これらの取り組みをやめることは苦しい選択である。そのため、学級討議では本音にせまる議論が展開された。環境教育というと、最後は「みんなでゴミを減らすよう努力しましょう」などのかけ声で終わってしまうことが多いが、今回は体育祭の応援バックという自分たちの身に具体的にふりかかる問題を取り上げたことで、生徒の本音を引き出すことができた。

また、体育祭などで生徒の自主性を尊重し、自分たちでつくる行事という本校のよき伝統を受け継ぎながら、応援バックの廃棄によるゴミを大幅に削減することができた。自分たちの身の回りの環境問題の解決を図る過程を学んだことが、生徒

が環境問題を解決する能力を身につける上で重要であったと考える。ダイオキシン問題のような専門的でわかりにくいことがらも、専門家にわかりやすく正しい知識を話してもらったことが理解を助けた。

今後も生徒会を中心に、学校の中にある環境問題に引き続き取り組むことが必要である。各教室に不要紙箱を自主的に設置したり、目には見えにくい生活排水の問題や給食の残飯の問題などについても取り組みたい。

このような実践では、生徒が全員で考えられる身近な問題を見つける視点を常に教師が持ち続けていけるかどうかが課題である。教師が生徒と同じ視点で学校生活を見直していきたいと考えている。

4 おわりに

本実践では、行事を通して問題に気づき、学び、行動し情報発信するといったスタイルで環境学習を展開することができた。本実践における学校行事と環境学習とのかかわりをまとめると以下の通りである。また、それぞれの学校行事、生徒会活動、学級活動の時期的な関係について、表3として提示する。

- ・課題に気づく・・・クリーン作戦、環境学習（講話）
- ・行事そのものの中に、課題があった・・・体育祭の応援バック
- ・意見を発表し合う場・・・生徒会、代議員会、学級討議、意見発表会
- ・地域に発信する場・・・平和行進
- ・地域に協力を求める場・・・PTAバザー
- ・行事以外の特別活動（生徒会活動など）が行事と密接に関わっている。

本実践のように、これからも行事を通して環境問題に限定せずにさまざまな課題に取り組みたい。その際、取り上げる課題は「横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」（文部省、1988）ということになるだろう。しかし、環境問題に限定しないということは「環境」について取り上げないという意味ではない。「環境」だけでなく「福祉」や「情報」「国際」などの課題と関連を持ったテーマ（鈴木、1998）を取り上げていくという意味である。そして、そのための核の行事として文化祭を想定している。

今後も、一つ一つの行事でどのような力を生徒につけることができるかをよく考えながら行事を改善しつつ、総合的な課題に取り組んでいきたい。

引用文献

- 文部省、1997、学校におけるゴミ処理に関わる環境衛生管理の徹底等について（通知）、文体学、292。
- 文部省、1998、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局。
- 森幸一、1999、体育祭のゴミ問題を考えよう、環境教育ガイド1999～2000年（教育技術増刊）、54（7）、78、小学館。
- 鈴木善次、1998、全国大会を終えて今、気になること、日本環境教育学会ニュースレター、34。

付記

本報告は、滋賀県甲賀郡甲南町立甲南中学校での1998年度の校内研究に基づくものである。著者は、当時の環境教育主任として実践の全体に関わった。